

の結果、サル被害が増えればサルを根絶すればよいと考えている。しかし、その中で比較的最近になってサルと接触するようになった地域で山の動物との共存や計画的開発を考えている人もいくらかはいるようである。当地区では、山林の開発による自然環境の変化がサル被害の増加の一因と考えられるので、今後、被害を予防する意味で、計画性のある開発が望まれる。

野猿公苑における生態系の保全と野外博物館活動の研究

正高信男（学振奨励研究員）・和泉剛（関西相互環境センター）・岩井健二（鴨沂高）
・太田映司（柏野小）

嵐山自然公苑は、研究上極めて重要な位置を占めると同時に、市街地に隣接しており、絶えずポピュレーション増大と猿害の発生という深刻な問題をかかえている。われわれが行った研究からは、次のような点が示唆された。

1. 研究期間中、数度にわたってリーダーの失踪がみられたが、それによって、集団がさして動揺する様子もなかった。嵐山集団に特有の条件の関与を考えねばならないが、餌付けによる集団の一定地点への求心的定着が強く関連していると思われた。
 2. ポピュレーションの増大は決して餌場の個体密度増大には結果せず、むしろ周辺化の促進と低順位メスとその子のそれへの参入が見られた。それは集団の分裂の可能性をはらむものとみなされ、その動態は極めて興味深い、同時に猿害に直結する問題でもある。
 3. それゆえ、公苑維持上の管理的理論として、および、研究の長期的継続の観点からも、ポピュレーションのある程度の調整はやむを得ぬ措置としてなさざるを得ない。そのためには、過去の研究経緯をふまえ、血縁関係その他を考慮しつつ、長期展望に立った研究者との緊密な連絡が必要であろう。
 4. 観光客による不特定の給餌は、研究活動にとっては妨害要因となった。もとより野猿公苑のひとつの目的として営利性があり、困難な面もあるが、改善の方向を模索したい点である。
- 野外博物館活動については、博物館の効率的な

運営や取組みを考えるために、観光客、友の会、小・中・高校生を対象に、意識調査を試みた。

1. 楽しむ場の横溢により、野猿公苑への関心は極めて低い。
2. 自然や動植物に対する実質的な認識は低く、見て楽しむ一時的なものである。等々。

上記分析結果に基づき、野猿公苑が多くの人達に、観察・活動・作業をする場面を提供し、有機的な取り組みと運営の工夫を進めつつある。

課 題 2

志賀高原横湯川流域に住むニホンザル、A₁、A₂、B₂、C群の戸籍簿作り

常田英士（地獄谷野猿公苑）

ニホンザルの諸調査に際し、個体識別が必要である場合が殆んどである。更に群内の個体の血縁関係が分かっていると、多くの研究にとって有益である。

本調査は地獄谷野猿公苑に以前から蓄積されている資料に基づき、志賀高原の横湯川流域に生息するニホンザル志賀A₁群（約140頭）、A₂群（約80頭）、B₂群（約35頭）、C群（約45頭）の戸籍簿を作成し、研究者が利用できるようにすることを目的とした。

昭和58年度はA₁群、A₂群の全個体について個体カードを作成し、血縁図を作った。A₁群については3才以上、A₂群については1才以上の全個体の顔写真を撮影し、個体カードに貼った。C群については約半数の個体の顔写真を撮った。昭和59年度にはC群の残りの個体とB₂群と、過去に横湯川の各群に所属していたが現在はいないオスについての個体カードを作成する予定である。

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植性

小見山章（岐阜大・農）・和田一雄（京大・霊長研）
* 共同実研者

森林におけるニホンザルの行動を規制するのは、食物の分布と冬期のとまり場である。我々は志賀高原横湯川流域において、食物となる森林植物の

分布と果実生産量について検討を重ねている。

調査地では、いくつかの植生型がモザイク状に分布しており、主として沢－尾根といったような水分環境にもとづいてモザイクが配列している。

尾根上には、アカマツ林、中腹にはカンバ林やミズナラ林、沢沿いにはトチノキ・サワグルミ林がみられた。林分構造からみて、ブナ林が伐採された跡に生じた二次林のようである。

植生型によって食物となる植物体量は異なると思われるが、リタートラップをブナ林・ミズナラ林・湿性林にしかけて、落果量を測定した。

平均果実量（5年間）は、ブナ林 $97.4\text{kg/ha}\cdot\text{yr}$ 、ミズナラ林 $355.5\text{kg/ha}\cdot\text{yr}$ 、湿性林 $393.4\text{kg/ha}\cdot\text{yr}$ と推定されたが、年度間での変動が著しく大きかった。季節的には10月の落果量が最も多く、8月や11月で少なかった。樹種別にみると、やはり年変動が激しいが、それぞれの樹種に特有の周期が存在しており、それぞれの周期は必ずしも一致してはいなかった。

今年で6年間のデータを得た訳であるが、周期性から考えて、最低10年は同じ調査をくり返さないと、はっきりした落果の傾向をみることはできないだろう。不幸にして、本年度で本研究に対する共同利用研究費が打ち切られてしまった。今少し、地味なデータの積み重ねを行いたいところであった。

課 題 3

ニホンザルの群れサイズと採食・遊動の関係についての社会生態学的研究

大井徹・丸橋珠樹（京大・霊長研）

屋久島国割岳西斜面に隣接して生息する2群（半山A群とアルク群）を対象として、採食生態の群間変異の研究を、1983年5月（葉食の時期）と11月（果実食の時期）とに実施した。本報告では、個体追跡法とスキニング法による食物メニューと各食物種の時間割合の量的比較を主に述べ、食をめぐる社会関係（保食関係、攻撃行動など）やサブグループング現象などの分析は行わない。

5月に半山A群、アルク群が利用した食物種はそれぞれ24種、19種で、両群に共通した食物種は13種であった。利用度上位10種までの食物種ごと

の採食時間割合を加味して、共通度を計算すると36%であった。両群の遊動域の構成種はほぼ同じであるのに、大きな食性の差異があるといえる。

半山A群ではクリなどの落葉性の葉が常緑性に比べて3倍利用されるのに対して、アルク群では、シラタマカズラなどの常緑の利用が落葉の2倍も利用されていた。2群間で最も目につく差異の一つは、半山A群ではクワ・タブが最重要食物で50%を占めるのに対して、アルク群ではこの2種は6月の主要食物として利用されていたことである。顕著な落葉性の葉の利用と考え合わせると、半山A群はいわば“季節の先どり”をしていたといえるであろう。この群間差の要因の一つとして、半山A群の遊動域のなかで、2次林の占める割合がアルク群に比べてずっと高いことを指摘できる。活動時間のうち採食の占める割合は、群れサイズの大きい半山A群のほうが、アルク群に比べてずっと多かったが、1日の遊動距離に差はなかった。

11月では、半山A群34種、アルク群33種のうち22種が共通しており、上位10種までの共通度は56%であった。利用度上位3種のうち2種（マテバシイとウバメガシの果実）は共通しており、葉食の時期に比べて群間の差異は小さくなった。また、アルク群において、個体追跡法とスキニング法による結果を比較するとたいへんよく一致しており、この2法の互換性が確かめられた。

隣接する2群間でもかなりの採食生態の変異が存在することが明らかとなった。利用可能な食物供給の増減にしたがって、群れ間の食性の差異も増減すると考えられる結果が得られたが、食物条件の悪い葉食期にこそ詳細な比較を行う必要がある。半山A群は“季節の先どり”，アルク群は常緑の葉の利用という2つの違ったやり方でこの時期に対応していると仮定できるが、その検証と要因の解析は今後の課題である。

上部域にすむヤクザルの生態学的研究

好廣真一（龍谷大・経営）・増井憲一（京大・理）

異った植性が垂直に連続分布している地域でのヤクザルの生態を解明するために、屋久島西部の瀬切川流域、大川流域の800～1400mの地域と、永田川、大川、小揚子川流域の1200～1700mの